

懐疑論と宇宙論

乗立 雄輝

本稿が目指すのは、パース（Charles Sanders Peirce, 1839-1914）研究者の間でも評価が芳しくないパースの形而上学、特に宇宙論（cosmology）と宇宙生成論（cosmogony）を、カヴェル（Cavell 1979）、マクダウェル（McDowell 1996）、ブランダム（Brandom 2011）が投げかけた問いへと接続することを試み、その現代的意義を探る出発点にすることである。本稿は以下のように進む。

まず第1節「はじめに——パース宇宙論の生成」において、パースの宇宙論の生成史について概観する。第2節「パース宇宙論の概観」においては、その宇宙論の内実の概観を試みる。第3節「パースの宇宙論の現在地」では、研究者たちによるパースの宇宙論についての否定的な見解を挙げ、その理由を探る。第4節「ブランダムによる別視点からの評価——懐疑論を克服するための宇宙論」では、パースの宇宙論に対して一定の肯定的な評価を与える現代のプラグマティストであるブランダムの議論を取り上げ、懐疑論と宇宙論の関係について考察する。第5節「『懐疑論』の三つの層」では、ローティによるカヴェル批判が明らかにした懐疑論の三つの層を取り上げ、カヴェル、ブランダム、マクダウェル、そしてパースにとってどの懐疑論が問題であったかを検討する。そして最終節の第6節「『現実性』、そして『可能性』への新たな視点と宇宙論の展開」においては、パースが現実性と可能性についての存在論的意味づけを変更していったことが、彼の宇宙論にどのような変更を加えることになったのかを考察する。

1. はじめに——パース宇宙論の生成

パースの宇宙論は、研究者からは「宇宙論の時期」（cosmological period¹）と呼ばれることもある、1884年から1898年にかけて展開されたものである。15年もの歳月にわたって練られ続けていることから分かるように、パースの宇宙論は一挙にその全貌が姿を現したわけではなく、その時々のパースの別領域での議論、特に存在論における思考の進展が影響を及ぼしたことによる変容を遂げながら構築されていったものである。

1 cf. Short 2010:522.

さて、パースの宇宙論の萌芽は初期にも観られるものの、それが具体的な姿を現すのは1883年から翌年にかけての「企図と偶然」(Design and Chance, EP1:215-224²)の中においてである。そこでは、絶対的偶然 (absolute chance) から生まれた諸習慣 (habits) が進化を重ねていった結果として、現に宇宙の中で働いている諸々の自然法則となったという、後の進化論的宇宙論 (evolutionary cosmology) の原型が示される。これからも分かるように、本来ならば、その存在の起源などが説明できない、すなわち「根拠なく受け容れねばならない事実」(brute fact) であるがゆえに「法則」(law) と呼ばれる自然法則など、(偶然そのものを除く³) この宇宙に存在し生起する森羅万象を説明するためにパースの宇宙論は構想されたのである。

その数年後、1887年から翌年にかけて書かれた「謎への推量」(A Guess at the Riddle, EP1:255-279) という草稿においてパースは宇宙論への本格的な一歩を踏み出す。それは、偶然、法則、そして「習慣形成」(habit-taking) という互いに還元不可能な三つの要素が宇宙の中で働いているという教説であり、それを基軸に宇宙の姿を描き出すと同時に、すべての知の体系を再構築するという建築術的 (architectonic) な構想が提示される。

そして、パースの宇宙論が本格的に展開されるのは、1891年から1893年にかけて雑誌『モニスト』(The Monist) に連載された五編からなる「形而上学シリーズ」(Metaphysical Series) と呼ばれる諸論文である。それは「諸理論の建築術」(The Architecture of Theories, 1891, EP1:285-297)、「必然論の批判」(The Doctrine of Necessity Examined, 1892, EP1:298-311)、「精神の法則」(The Law of Mind, 1892, EP1:312-333)、「人間の鏡のような本質」(Man's Glassy Essence, 1892, EP1:334-351)、「進化的愛」(Evolutionary Love, 1893, EP1:352-371) であるが、こ

2 本稿でのパースからの引用は、可能な限り、入手と参照が容易でテキスト・クリティクが最も十分になされている *The Essential Peirce: selected philosophical writings*. Volume 1 (1992), Volume 2 (1998) から行い、EP1:215 のように「:」の前で巻、後でページ数を表す。 *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* からの引用は慣例に従い、CP.1.23. のように、前の数字で巻、後ろの数字でパラグラフ番号を表記した。さらに *Reasoning and the Logic of Things*. (1992 [1898]) からの引用は「RLT」の略号を用いる。また日本語訳がある文献については「〇〇頁」とその訳書のページを表記した。

3 規則的なもの、斉一性を示すもの、すなわちあるパターンを示すものすべてについては説明が必要であるし、またその説明も可能であるというのがパースにとって探究を導く「統制的希望」(regulative hopes) であったが、不規則なもの、すなわちランダムに生起するものは説明が不要であり、また説明も不可能であるというのがパースの基本的な主張である (cf. *The Doctrine of Necessity Examined*, EP1:308 ff)。この偶然を宇宙の起源に置くことで、「なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか?」(Why is there something rather than nothing?) の問いを解決しようとしたとフックウェイは解釈する (Hookway 1985:265. ff)。

のように短い期間で矢継ぎ早に同じ課題を掲げる論文が書かれたのは、(本人にとっては気の毒なことではあるが) パースが合衆国沿岸測量部を解雇されたことで時間的な余裕ができたという外的な要因と共に、一連のシリーズが始まる直前の 1890 年に、後述する、パース自身の「現実性」についての理解が大きく変容したという内在的な要因も大きく働いている。

この宇宙論の時期の掉尾を飾るのは、1898 年にマサチューセッツ州のケンブリッジで行われた「推論と諸事物の論理」(Reasoning and the Logic of Things, Peirce 1992 [1898]) である。ここでの議論も、先述した『モニスト』の形而上学シリーズと同様に、直前の 1897 年にパースの「可能性」についての存在論的見解が大きく変更したことが強い影響を与えている。

2. パース宇宙論の概要

それでは、そのような生成史をたどったパースの宇宙論とはどのようなものなのか。Peirce (1992) の編者でもあるハウザー (Nathan Houser) が、その書の序論で述べている簡潔にして要を得たパースの宇宙論の概要をほぼそのまま踏襲かつ要約、そして適宜、補足して記したい (EP1:xxxix-xxxiii⁴)。

【A: 偶然による、「無」からの純粋な可能性の世界の誕生】

- (1) 初めに「無」(nothing) があった。
- (2) しかし、その始原の無とは、虚無もしくは空っぽの空間ではなく、「事物がないということ」(no-thing-ness)、すなわち、いかなる確定 (determination) もなされていないという特徴のことを指す。パースはこの状態を「完全に未確定で無次元な潜在性」(completely undetermined and dimensionless potentiality) として描き、それらは自由 (freedom)、偶然、自発性 (spontaneity) によって特徴付けられる (CP.6.193, 200)。

4 ハウザーの原文は箇条書きになっておらず、当然、番号も振られていないが、ここではわかりやすくするためにそれらの処置を施した。またハウザー自身も同箇所の注で述べているように、この説明は Turley (1977) を元になっているが、このターリーの著書は若干古いものの、パースの宇宙論について適切な見取り図を与えてくれる。さらに、これもハウザー自身が述べているが、この進化的宇宙論の概略には、記号論 (semeiotic) のプロセスや、「進化的愛」(1993 年) で展開されているような、宇宙の進化の原動力が「愛」(agape) であるといった独特の宗教的色彩を持つ議論が組み込まれていないが (EP1: xxxiii)、全体としてはパースの宇宙論の本質を明確に捉えた妥当な説明だと論者は考える。

- (3) その世界の進化における最初のステップは、未確定で次元を持たない潜在性から、確定された潜在性（determined potentiality）への移行である。この移行において働いているのは偶然もしくは純粋な自発性である。この新しい状態は、一つのプラトンの世界（a Platonic world）、すなわち純粋な第一のもの（pure firsts）の世界、単にそれ自身は永遠不変に留まる諸可能性である諸々の質（qualities）からなる世界である。ここにおいて、宇宙は完全な無性（nothingness）の状態から渾沌（chaos）の状態へと移行することになるとパースは述べる。

【B: 純粋な可能性からの現実性の世界の誕生】

- (4) 世界の進化のこの時点まで、存在するすべては実在的な可能性（real possibility）、第一性（firstness）である。したがって、現実的なもの、つまり第二性（secondness）はまったく存在しない。
- (5) ここに、渾沌である可能性と潜在性が自身を現実化（self-actualizing）する、つまり、諸々の質からなるプラトンの世界から現実性の世界が生成するという、世界の進化の第二のステップが起こる。
- (6) 第二性の世界とは、諸々の出来事、諸事実の世界であり、それは現実化した諸々の質の相互作用によって成り立っている。
- (7) しかし、この世界は第三性（thirdness）、すなわち法則というものを未だに含んでいない。

【C: 習慣獲得の傾向による、法則に統べられる世界の誕生】

- (8) 第三性への移行という、宇宙的進化の三番目の大きなステップは、諸事実の世界に本来的に備わっている「習慣獲得の傾向」（habit-taking tendency）の結果である。
- (9) 習慣獲得の傾向とは一般化する傾向（generalizing tendency）であり、時間と空間から物理的質料、自然の諸法則に至るすべての斉一性の生起は、宇宙が諸習慣を獲得する傾向の所産として説明可能とされる。
- (10) パースは、偶然と自由が、習慣と法則へ屈服することを、具体的合理性への成長（a growth toward concrete reasonableness）とみなし、その成長の過程としての進化のまっただ中にわたしたちはおり、その進化はまだ途上であると考えている。

- (11) パースは、宇宙の歴史の終わりを、残余の自発性がまったくなく、完全に法則に支配された精神が結晶化する（真に具体的な合理性となる）と見定めていたにもかかわらず、彼は自由と創発性（originality）の要素は、偶然と法則の間の均衡の状態としての宇宙の中でも生き残り続けると考えていた。

ここでパースの存在論的カテゴリーについて説明する紙幅がないが、【A: 偶然による、「無」からの純粋な可能性の世界の誕生】という宇宙の始原の段階は偶然性や可能性として特徴付けられる「第一性」（firstness）しか存在しない局面であり、次にそこから生まれてくる【B: 純粋な可能性からの現実性の世界の誕生】においては現実性のカテゴリーである「第二性」（secondness）が支配的になる。さらにそこから【C: 習慣獲得の傾向による、法則に統べられる世界の誕生】に至って、法則や思考といった「第三性」（thirdness）が宇宙を統べる原動力となり、最終的に、さまざまな偶然による逸脱などを孕み、かつその逸脱をも一つの原動力としながら「具体的合理性の成長」として宇宙が進化していくというパースの宇宙論、宇宙生成論の全貌が明らかとなる。

3. パース宇宙論の現在地

このパースの宇宙論に対して下されるパース研究者による評価だが、冒頭でも述べたように、その多くは決して高いとは言い難い。というよりも、極めて厳しいと言った方が正確だろう。その主な理由をいくつか挙げたみたい。

まず第一に、パースの宇宙論と、他の彼の理論、たとえばプラグマティズム、論理学での議論との間で整合性が保てないというパースの哲学全体に内在する問題点が挙げられる。これはパース研究の草創期から現在に至るまで続いている評価でもある。たとえば、パースの宇宙論に対して頻繁に参照されるのがギャリー（W. B. Gallie）による、パースの哲学にとっての「黒い羊」（black sheep）「白い象」（white elephant, Gallie 1952:215）、つまり「持て余し物」という評は、多くの研究者の当惑を代弁していると言えるだろう。

また、同じく草創期の研究にあたるグージ（Thomas A. Goudge）による Goudge (1950) は二部構成をとっており、第1部が「パースの自然主義」（Peirce's Naturalism）、第2部が「パースの超越論主義」（Peirce's Transcendentalism）となっ

ている。この構成そのものに、グーゼが見て取った、パースの自然主義者としての側面と超越論主義者としての側面との間にある克服しがたい緊張関係が如実に表れている⁵。もちろん、パースの宇宙論はその思弁性ゆえに超越論主義を体現しているとグーゼは考えるのだが、それとパースの、ときに（誤って）実証主義との類似さえ語られることもある、プラグマティズムの意味論や科学的探究の理論、そして論理学といった自然主義的傾向の間をつなぐものを見出すことは決して容易ではない。

そして、研究者の間でパースの宇宙論の評価を厳しくしている二番目の要因として、彼が形而上学、そして哲学全体が「科学的」であるべきだということを再三にわたって主張し、かつ、非科学的態度をとる当時の哲学者たちを散々非難しているにもかかわらず、実のところ、肝心のパースの宇宙論がまったく科学的ではないという点が挙げられる。

たとえば、1898年に行われた連続講義「推論と事物の論理」の第一講義において、パースは「現在の哲学が極めて幼稚な状態にある」とし、その原因を「今世紀[19世紀]に哲学を追究してきた主だった人々が、解剖室や実験室で教育を受けることによって、真に科学的なエロースに駆り立てられた者ではなく、反対にさまざまな神学校(seminaries)の出身である」(EP2:29, RLT:107 [13頁]) からだと述べる。すなわち、初期の「信念の確定」(The Fixation of Belief, EP1:109-123, 1877)でも述べられているように、現実(経験)に即し、探究の過程における改訂可能性を(否定的要因としてではなく)肯定的に含みながら、最も信頼性と永続性の高い信念を確保する方法が「科学の方法」(method of science)である以上、哲学もまた、成果を挙げ続けている科学の方法を採用すべきであるというパースの主張は生涯にわたって貫かれている。まさしくこれは、形而上学といえども単なる思弁に留まることは許されず、経験による度重なるテストにさらされた上で主張されねばならないという、グーゼの指摘するパースの自然主義的側面の顕著な現れとあってよい。

しかし、おそらくはパースの最も独創的な形而上学的な学説であると言ってよい進化論的宇宙論こそが、彼が標榜していたはずの「科学的形而上学」(scientific metaphysics)の要件を満たさない、つまり経験的検証もしくはテストの段階にま

5 レイノルズは、パースの自然主義的側面をブリテン島の傾向、そして超越論主義的側面をドイツ的傾向と呼び、後者にドイツ観念論における「自然哲学」(Naturphilosophie)の思弁性が与えた影響を強く見る(Reynolds 2002:3, 176)。レイノルズも参照しているように、エスポジトは、シェリングとドイツ的自然哲学がパースに与えた影響を考察している(Esposito 1980)。

で至っておらず、純粋な思弁の段階に留まっているのである。

このパースの宇宙論が、彼の哲学の他の領域と来している齟齬は、まさしくギャリーが指摘したパース哲学にとっての「黒い羊と白い象」にほかならないが、それを強く主張し、そもそもパースに「宇宙論」と呼ぶに相応しい体系的な学説があったと考えること自体が間違いではないかとまで断言するのが、宇宙論否定派の急先鋒であり、また影響力の大きい研究者でもあるショートである (Short 2010, 2023:ch. 6)⁶。

ショートが掲げるパース宇宙論を否定する旗幟は鮮明である。彼によれば、パースは宇宙論を構想する段階までは至ったが、結局のところ、それをパース的な規準を満たす一つの形而上学的な学説、すなわち経験的にテスト可能な段階にまで発展させることに失敗し、最終的には、その構想を放棄したと考えるのが妥当ということになる。ショートは、パースの宇宙論に対して両極端にわかれる評価を分類しているレイノルズの区分けをそのまま踏襲し (Reynolds 2002:1)、パースの宇宙論に対して批判的な研究者を「科学的な精神」(scientifically minded) をもった人たち、肯定的な評価を与える研究者を「あまり科学的でない精神」(less scientifically minded) をもった人たちとし、後者を徹底的に批判する (Short 2022:127⁷)。そして、最終的に、パースが自身の宇宙論を放棄するに至ったこと自体が、自身の仮説が経験的なテストを通過しない誤り、もしくは、それ以前に仮説として成立し得ないものであったならば、即座にそれを取り下げる科学者としての真摯な態度であって、パースの進化論的宇宙論が消え去ったことそのものがパースが終生にわたって守り通した科学的態度の表れであり、さらに、それこ

6 この点について、ショートが、パースの観念論的傾向よりも実在論的傾向を高く評価していることにも由来している。それは参照したショートの文献を見ても明らかであるが、ハウザーによる指摘も参照のこと (EP1: xxxv)。ちなみに、ショートの評価するパースの実在論的傾向とは、一般者 (generals) や可能性の実在を訴える、より形而上学的志向の強いパースの「スコラの実在論」(Scholastic Realism) ではなく、先述した自然主義的色彩の濃い、現代風に呼ぶならば科学の実在論の側面と考えた方がよい。このパースにおける観念論とも見られるスコラの実在論と、より自然主義的な科学の実在論との緊密な関係については、それを現代的なラベルとして考えてしまうと理解がさらに困難になるが、レーンはこの点について明晰な示唆を与えている (Lane 2019)。

7 ショートが批判の槍玉に挙げているのは、ターリー (Turley 1977)、エスポジト (Esposito 1980)、ハウスマン (Hausman 1993)、アンダーソン (Anderson 1995)、パーカー (Parker 1998) といった研究者たちである。もともと、別の論文においてショートは、アンダーソンがパースの宇宙論について施した説明 (Anderson 1995:63-7) に最も説得力があることは認めているが、それが非常に短く、またパースの宇宙論に対する諸々の批判に應えていないという点で不十分であると断定している (Short 2010:522)。

そがパースの哲学の「進化」にほかならないと結論づける。

そして、先述の二点以上に、これが最も重要な問題かもしれないが、物理学を中心とする自然科学が目覚ましい成果を挙げ続けている現在、哲学、もしくは人文学が宇宙や世界の構造について何かを言うことができるのか、かりに言うことができたとしても、そのことにどれほどの意味があるのかという根底的な疑念がある。これはパースの宇宙論、形而上学に限られた問題ではなく、現在の形而上学が直面している問題でもあるだろう⁸。

それを端的に示すのが、パースの宇宙論を現代において受容する際に決定的な障壁となっている、その強い観念論的傾向である。たとえば、「諸理論の建築術」で提示される「客観的観念論」(objective idealism)は、パースの宇宙論の根幹をなす構成要素であるが、それは以下のような教説である。

宇宙についての一つの理解可能な理論は、物質とは活力を失った精神 (effete mind) であり、硬直した諸習慣 (inveterate habits) が物理的法則になるという客観的観念論である⁹。(EP1:193)

これには、パースに対して概ね好意的な解釈を示すことの多いハッキング (Ian Hacking) さえも、「1898年にはありふれていたが、1989年に聞くとかなり衝撃的である」(Hacking 1990: 213, [316頁])と率直な感想を述べているように、あまりにも古色蒼然としていて、現代においては批判的にすら継承が難しいことは間違いない。

そのことの一要因として、パースが宇宙論を展開したのは、奇しくも、アインシュタインの奇跡の年 (1905年) の数年前であり、パースがリアルタイムで展開を追っていた「物理学」と、それ以降の物理学の間には決定的な断絶があることが挙げられるだろう。

確かに、パースの宇宙論、形而上学を、現代物理学が提示する宇宙像の先駆として評価する試みもある。たとえば伊藤邦武はパースの宇宙像が現代物理学

⁸ たとえば、この問題についてはトマソン (Thomason 2017) を参照。

⁹ これには明らかにシェリングの影響が見られ、パース自身も「シェリング風の観念論」(Schelling-fashioned idealism)の一種であることを自認している (The Law of Mind; EP1:312)。パースがシェリングに与えていた高い評価と、パースの宇宙論がシェリングの自然哲学を現代物理学によって更新したものであることを自負していた点については、Esposito 1980:173, Reynolds 2002:6ff, Lane 2019: 78などを参照。

における「多宇宙論」(multiverse theory) そして宇宙の起源に関する理論との類似性を見せていることに注目する(伊藤 2006: 197 – 200 頁)。また、よく参照されるのは、プリゴジン(Ilya Prigogine) のパースに関する言及である¹⁰。プリゴジンはスタンジェール(Isabelle Stengers) との共著の最終部において、「チャールズ・S・パースの仕事に十分な紙面を割くことができなくて残念である」と述べ、偶然から秩序が生まれるとパースが述べた箇所を引用した上で、次のように指摘する。

パースの形而上学もまた実在とは無縁の哲学のもう一つの例と考えられた。しかし、事実は違う。今日パースの仕事は、物理法則に含まれる多元性の理解に向かつての、先駆的な一歩だと思われる。(プリゴジン、スタンジェール 1987[1984]: 390 頁¹¹)

形而上学の使命とは、実在と実在的対象の最も一般的な諸特徴を研究することであり、そのことによって科学によりよい仮説を提供することが可能になり、科学的探究を推進していく指導原理になると考えていたパースにとって¹²、このような形でプリゴジンから自説が評価を受けることは望むところであったかもしれない。

しかし、プリゴジンも述べているように、パースの宇宙論は現代物理学にとって先駆的な一歩であるかもしれないが、やはりそれは「先駆」にすぎないのであって、現在進行している自然科学の最前線にあるものではない。つまり、現代の科学者がパースの言説からなんらかのインスパイアを受けることはありうるだろうし、それはパース本人にとってのみならず、パースを研究する者にとっても興味深い事態であるかもしれないが、現代の科学との関連でパースの宇宙論を語ってしまうことは、むしろそれを歴史的な遺産、いわば骨董的価値としての評価の内に止めてしまうことになるのではないか。

10 パースの宇宙論について緻密な分析を行っているレイノルズもプリゴジンに言及しているが、その評価については懐疑的な含みを持たせている(Reynolds 2002:173ff.)。

11 ちなみに、同箇所でもプリゴジンがパースに続けて挙げるのはホワイトヘッドであり、『過程と実在』の『『万物は流転する』』という文章の意味を明確にすることが形而上学の主たる使命の一つである(Whitehead 1929[1978]:208) という言葉を引いている。

12 パースは、良質の形而上学なくして科学的探究を進めることが、その実、とんでもないガラクタの形而上学を携えて思考してしまい、探究を隘路へ導きかねないことを常に警告する。cf.CP.1.129.

そこでパースの宇宙論を骨董品が並ぶ陳列棚から下ろして現代物理学と対峙させようとするならば、ショートが指摘したパースの宇宙論の非科学性、すなわち実証できるレベルに至っていないという問題に直面せざるを得ない。ショートが指摘するように、少なくともパースが提示した宇宙論は、神学校で教えられる類いの、いわばアームチェアで練られた一つのファンタジーに過ぎないということになってしまうのである。これは、現代の自然科学と張り合うような形で哲学が宇宙論を提示したとしてもまったく勝ち目がないという常識に近い考え方ではないだろうか。

このようなパースの宇宙論に内在する要因、そして現代の科学的探究という外在的な要因ゆえ、パースの哲学の現代的意義を見出そうとする場合、そのパース研究の草創期から呈されていた議論へと立ち戻ることになる。

すなわち、ギャリーやグージが見出したパース哲学に内在する自然主義的な側面と超越論主義的な側面の間にある緊張関係についての認識は現在でも継承されているが、それは宇宙論をその内に含むパースの形而上学を無視するというさらにラディカルな方向に進んでいるように思われる。つまり、先述のギャリーやグージ、さらにはマーフィー（Murphy 1961）といった前の世代の研究者たちは、なんとかしてパースの哲学全体についての統一かつ整合的な理解を得ようと悪戦苦闘したわけだが、現在の多くの研究者はそのような試みを放棄し、現代的な意義を持ちうる部分、すなわちグージのいう「パースの自然主義」のみを議論の対象とし、強調する。それは、パースの哲学において現代的意義を持ちうるもののみを取り上げることで、ある意味ではパース哲学の「救済」を目指すものであり、また現代の議論と接続することで生産的な議論へ寄与しようという健全な目標の下で展開されているものであり、そのこと自体には一定の評価が与えられるべきであろう¹³。

13 容易に想像されるように、この方向を推し進めると、パースを自然主義者、もしくは「真理のデフレーション化」を目指した、ある種のデフレーション主義者（deflationist）として理解することになる。この点についてはミサクが論じているが、パースをデフレーション主義者として理解することについては一定の留保をつけていることにも注意を払いたい（Misak 2000:51ff、邦訳 84 ページ以降）。また、ときにパースが（特殊な形態の）デフレーション主義者として理解される理由は、彼が真理の対応説（correspondence theory）を拒絶しているように思われるからである（CP.5.416, Misak 2000 : 55, [邦訳 92 ページ]）。しかしレーン（Lane）は、パースの真理観は、「実在とは、探究の末に獲得された真なる信念（意見）によって表象されたものである」という表象主義的側面（representationalist aspect）と、真なる信念とは探究者が繰り返し科学的方法を用いることによって獲得した、永続的に安定した信念のことであるという探究的側面（investigative aspect）があることを詳細に考察している（Lane 2018: chap. 1: The Dual-Aspect Account of Truth.）。その考察を踏まえた上で、ミサク（Misak 2004[1991]）、そしてフックウェイ（Hookway 2000）は前者の表象主義的側面がパー

4. ブランドムによる別視点からの評価——懷疑論を克服するための宇宙論

しかし、パースの宇宙論は、彼の哲学全体にとっては確かに「黒い羊と白い象」、すなわち、救済困難な「不採算部門」といえるかもしれないが、はたしてそれを切り捨てることだけがパースの哲学を正当に評価することにつながるのだろうか。言い換えるならば、それはパースの議論が現代において持ちうる可能性を殺ぐことになるのではないか。たとえばアンダーソンは次のように述べるが、論者は彼の指摘にまったく同意する。

彼の論理学における統制的希望（regulative hopes）に基礎づけられた、閉じた宇宙論への抵抗は、おそらくパースがそのプラグマティズムの後継者へもたらした最も意義のある形而上学的貢献の一つである。しかしながら、後世のプラグマティストたちは論理学と形而上学におけるパースのテクニカルな業績からは離れてしまっているにもかかわらず、未来の開放性を強調し続けている。（Anderson 1995:64-5）

ここでアンダーソンが述べていることには若干の補足が必要であろう。彼の言う、パースの「論理学における統制的希望に基礎づけられた、閉じた宇宙論への抵抗」とは、最終的に真理へと到達することを「希望」として抱き続けることが探究全体を統制する理念になると同時に、その探究が常に成功するわけではなく失敗の可能性を絶えず孕み続けていること、すなわち可謬的（fallibilistic）であることは、宇宙そのものと、その内に在る私たちが進化の途上にあることの裏返しであって、むしろ探究が経験に即している健全性の証しなのである。

すなわち、探究が遂行される以前に真理があらかじめ定まっている「閉じた宇宙」があり、それを正確に記述することが探究であると考えことは、パースによれば誤った形而上学的先入見に汚染された世界観なのであって、宇宙が進化の途上のまっただ中にあるというパース的な進化論的宇宙論こそが彼の自然主義的な側面を存在論的次元から支えているのである。つまり、グージがパースの哲学の自然主義的な側面と超越論的側面の間に見出した乗り越えがたい断絶

スによって最終的に放棄されたと論じているが、その主張を支持する文献的裏付けはなく、むしろその両側面が併存していることがパースの真理観の特徴だとして両者を批判している（ibid. p.14.）。この両者が併存しているという特徴が、パースの真理観の誤解されやすい要因であり、また統一的な理解を困難にする壁でもあるが、レーンの主張に論者も賛同する。

は見かけ上のものであって、後者が前者の前提となつて初めてパースの哲学が成立しうると考えるべきであろう。したがって、パースの古色蒼然とした宇宙論を無視することは、彼の議論の内にある現代的意義を確保しうる短期的な利益をもたらすものであるかもしれないが、パースのおそらくは最も現代的な意義をもちうる改訂可能性に開かれた「未来の開放性」を論理的裏付けのない単なるスローガンにしまいかねない危険を孕むものと言つてよい。

先に述べたようなパースにおける自然主義的傾向と超越論的傾向の分断を説くグーゼとは反対に、その両者の調和をパースは目指していたとして、パースの宇宙論に一定の好意的な評価を与えるのが現代のプラグマティストであるブランダムである（Brandom 2011 [2020]）。

それは、以下のようなブランダムの古典的プラグマティズムに対する位置づけからも窺うことができる。

ごく大まかに言えば、チャールズ・サンダース・パース、ウィリアム・ジェイムズ、そしてジョン・デューイという古典的アメリカン・プラグマティストたちは、ドイツ観念論の伝統を自然化する（*naturalizing*）というヘーゲルからすでに始まっていたプロセスを完遂することによって、このドイツ観念論の伝統を発展させた。（Brandom 2011:5 [8 頁]、下線部は原文イタリック）

自身も述べているように、ブランダムの見立ては大まかすぎかもしれないが、彼が古典的プラグマティズムを「第二の啓蒙」（Second Enlightenment; *ibid.*: 35ff. [65 頁以降]）の端緒と捉え思想史のなかに置き直すとき、パースの宇宙論は独自の色合いを持つものとして現れる。

ブランダムは、古典的プラグマティストの中でもパースは、自然主義と経験論の間の緊張関係をうまく取り結んでいたと評価する¹⁴。ブランダムによれば、17世紀後半から始まる第一の啓蒙によって、「事物がどうあるか」ということをめぐる存在論における自然主義と、「わたしたちは事物をどのように理解できるのか」という認識論における経験論との間に緊張関係が生まれ、それは20世紀にも引

14 ローティと現代のプラグマティズムをめぐり優れた論考を展開している朱喜哲は（朱 2024）、ブランダムの、師であつたローティ譲りの無関心さと無理解を指摘している（同書:60, 61 注 [37]）。しかし、ブランダムの個々の論点では確かに朱の指摘は正しいものの、むしろパースの哲学全体を捉える俯瞰的な視点からの理解という点では説得力のある見方を提示していると論者は考える。

き継がれているという (ibid: 7. [12 – 13 頁])。それはヒュームにおいて「ニュートン力学の法則などの諸法則を、単なる規則性からは区別される必然性を有しているものとして知る、あるいは理解するということを可能にするようなものを、経験のなかに見つけ出せずにいる」(ibid.) という懐疑論¹⁵の形態を取ることになる。それはウィーン学団における、経験論に優位を認めるシュリックと自然主義に軍配をあげるノイラートの対立にも見られ、そして、クワインもまた「自身が(論理)経験主義者として抱く様相への敵意を、科学が出す意見に優位性を認める自身の自然主義的態度と完全に調停するということは、ついに叶わなかった」(ibid.)と断じる。

それに対して、古典的プラグマティズムの自然主義と経験論は、それ以前の自然主義と経験論よりも、それ以降のそれらよりもはるかに上手く噛み合っており、両者は緊張関係にあるどころか、互いが互いを補完し、相互に支え合う関係になっているとブランダムは評価する。それを可能にしているのは、古典的プラグマティスト、特にパースがあの宇宙論で論じた世界観である。やや長いが、さきに概観したパースの宇宙論と照応するものなので引用したい。

世界と、世界についての私たちの知識は、両方とも単一のモデルに基づいて解釈される。すなわちそれらは無作為な可変性の海の上に秩序をばっかりと浮かび上がらせる統計学的な選択的・適応のプロセスによって生み出された、変化するかもしれない偶然の産物と解釈される。競い合うもろもろの習慣の集まりを包摂している環境と相互作用することを通して、相対的に安定した一群の習慣が生起し、維持されるというプロセスの観点から自然と経験の両方が理解されることになる。(中略) 経験を習慣の動的な進化として解釈すれば、知識主体であり行為者である経験主体が関わりを持ち、手を加え、適応してゆく対象であるところの事物が有している様相的に頑強な習慣(modally robust habits)に、どのようにして経験主体がアクセスできるようになるのかを、理解しようと骨を折る必要はない。プラグマティズムの形式による自然主義と経験論は、一枚のコインの表裏なのである。(ibid: 8. [13 – 14 頁])

ここでブランダムはパースの名前を出していないが、同書の別の箇所、パー

15 ブランダム自身はここで「懐疑論」(skepticism)という言葉を使っていないが、そう理解して問題ないであろうし、本稿の文脈に即してこのように表現した。

すが、人間が経験において習慣を獲得していくプロセスを無機物の方へも拡張し、「正しい原理や法則というものの自体も変化しうる」という「ある種の存在論的な可謬主義ないし可変主義 (*ontological fallibilism or mutabilism*)」をプラグマティストは受け容れ、「事物の相対的に落ち着いている、固定化された性質、つまるところ事物の習慣というものの」が進化における諸事物の適応の結果であると理解されると述べる (ibid: 37-8. [70 頁])。そして次のように指摘する。

……プラグマティズム的な理解に基づけば、知る主体と知られるもの (*knower and known*) は、渾沌から秩序をもたらす (*bring order out of chaos*¹⁶)、無作為的な変化から安定した習慣をもたらすという、同じ一般的メカニズムに訴えることによって、同様に説明が可能である。そのメカニズムとはすなわち、進化と学習のプロセスが共有する、統計的で選択的な構造である。その構造は、物理的規則性が生起するプロセスに始まり、有機物が局所的かつ一時的に安定した形態を進化させるプロセスを経て、さらに、動物が局所的ないし一時的に適応的習慣を獲得する学習プロセス、ひいては日常言語使用者の教えられて得たわけではない常識的な知性、そして究極的には科学的理論家の方法論にまで伸びる、大きな連なりに含まれるすべての構成員をまとめあげる (ibid: 38. [73 - 4 頁])。

引用したブランダムの記事は、まさしく「大きな連なりに含まれるすべての構成員をまとめあげる」パースの宇宙論の要約になっており、それが知るもの（認識主体としての人間）と知られるもの（世界、自然）との間にある乖離、すなわち懐疑論を克服するものとしての役割を果たしていることが示されている。このような人間と自然との間に同質的な関係を見出す世界観を、パースは、第一の啓蒙が基盤としていた必然性や普遍性という様相を基軸にしたニュートン力学ではなく、「偶然性」という様相を中心に置く統計科学とダーウィンの進化論を基盤に構築したとブランダムは述べ¹⁷、パースに始まる「第二の啓蒙」としてのプラグマティズムの中心にあるのは、この統一的な見方であると主張する (ibid.)。

16 先に触れた、パースの宇宙論への言及があるブリゴジンとスタンジェールの共著のメインタイトルが『渾沌からの秩序』*Order out of Chaos*, 1984) であることを思いおこさせる。

17 レイノルズは、このようなパースの形而上学の体系を「ダーウィンの進化論と統計的な熱力学と融合したヘーゲル的な弁証法的観念論」(*Hegelian dialectical idealism meets Darwinian evolution and statistical thermodynamics*, Reynolds 2002:7) とユーモラスな表現をしている。

このようにパースの宇宙論に一定の評価を与えるブランダムの主張の根幹にあるモチベーションは、パースの宇宙論に対して批判的な論者たちのそれとはまったく異なるものであることは明らかだろう。

すなわち、それは懐疑論を克服するための一つの方法として、パースの宇宙論を取り上げるというものである。ここで論者が「懐疑論」と呼んでいるのは、ブランダムが、17世紀後半の第一の啓蒙から現代に至るまで、自然主義と経験論との間の調停がうまくいっていないということを指しているが、それには三つの層があると考えられる。

5. 「懐疑論」の三つの層

ここでブランダムが問題視する自然主義と経験論との乖離は、マクダウェルによって「近現代哲学¹⁸に特徴的な不安」(some characteristic anxieties of modern philosophy)、すなわち「心と世界との関係について」の不安という形で表される(McDowell 1996:xi [1 頁])。それは、所与の神話(myth of the given)を回避して自然主義を斥けるセラーズ、そして「信念の理由となりうるのは信念のみである」デイヴィッドソンの「整合説」の立場を固守する限り、以下のような問題と不安にさらされることになるという主張である。

近現代哲学の全体を覆っている諸問題が、特に知識をめぐるものであるように見えるのは確かである。しかし私が思うにこうした問題は、より深い不安がいささか不適切に表現されたもの——われわれの陥っている考え方では、心が自分以外の実在のを知ることができるということに問題が残るというだけではなく、そもそも心が自分以外の実在に触れられないままになるという脅威が漠然と感じられた結果——であると考えerほうがよい。われわれが知識を持っていると言ってよいかどうかという問題は、この不安の感じられ方のひとつにすぎず、そのもっとも根源的な感じられ方ではないのである (ibid.: xiii-xiv [5 - 6 頁])。

18 邦訳では modern を「近代」と訳しているが、後で触れる近代哲学の観念説(theory of ideas)の問題のみを指すのではなく、現代のセラーズやデイヴィッドソンも直面している問題をマクダウェルは指しているの、ここでは「近現代」とし、以下同様の対応をする。

このように、もしブランダムとマクダウェルの直面している問題を捉えるならば、それは「懐疑論」というよりも「不可知論¹⁹」(agnosticism)と呼ぶ方が適切かもしれないが、その懐疑論・不可知論そのものをどのような議論として理解するかということが実は困難を極める。論者は、パースは当初、その懐疑論を「反デカルト主義」、すなわち「懐疑を発するには、それへの回答が持たなければならない正当化以上の正当化が必要である」という議論によって一蹴できるのではないかと考えていたが、彼の思索が徐々に深まるにつれて懐疑論が予想以上の難敵であり、そのことが、パースの存在論の深化とそれに伴う宇宙論の変容、そしてプラグマティズムの終生にわたる再定式化の苦闘と記号論 (semeiotic) の確立への努力へと彼を導いたのではないかと考える。本稿で以上をすべて論じるのは難しいが、懐疑論・不可知論の多様性を示したい。

ブランダムの師であるローティがカヴェル『理性の呼び声』(Cavell 1979、邦訳 2024 年) に対して行った辛辣な批判 (Rorty 1982:176-190, chap. 10. 'Cavell on Skepticism' [第 10 章「カヴェルと懐疑論」387 - 413 頁]) は、その直接的な目的、すなわちカヴェルに見られる「職業哲学者的な懐疑論」とその他の形態の懐疑論の混同への批判²⁰を超えて、わたしたちに「懐疑論」の諸相を見せてくれる点で有益な示唆に富む。

ローティは、懐疑論には以下の二つの状況があるとした上で、カヴェルがその両者を混同していると批判する。

(a) リード [Thomas Reid] が「観念の理論 [the theory of ideas]」(知覚を直接的で確実に知られる所与によって分析する理論) と呼んだものによって生み出された、「職業的」(professional) 哲学者の懐疑論。

(b) われわれの用いる語が、実際あるがままの世界それ自体の在り方に何らかの関係をもつのかどうかという、カント的でロマン主義的な不安 (Romantic worry)。 (Rorty 1982:179 [393 - 4 頁])

19 agnosticism を「不可知論」と訳す場合、それは宗教上の問題を指すことが多いが、ここでは、文字通りの意味で「世界について知り得たつもりでも、実は世界について何も知っていない」という疑念を指すことにする。フォスター (Forster 2011) も、パースの執拗ともいえる唯名論への抵抗の根底には、懐疑論への警戒があると解釈する。

20 ローティのカヴェルへの辛辣な批判は、懐疑論を論じる『理性の呼び声』の第 2 部に集中しており、後半部についてはカヴェルの議論の視野の広さと深さを高く評価している。

ローティは、カヴェルが (a) と (b) を混同している、すなわち、歴史的に両者はさまざまな関わり合いを持つが、論理的には互いに別個のものであって、(a) から (b) の懐疑へ移行するには、それなりの説明が必要なのはだが、それをすることなくカヴェルは両者を一緒くたにして議論の俎上に載せていると批判する。言い換えるならば、(a) のような「狭い意味での懐疑論」すなわち、哲学の教授たちの間で儀式のようにやりとりされる(ritual intechanges) 意味での懐疑論が、深淵でロマン主義的な意味での懐疑論を理解するために重要なものであることを私たちに説得しなければならないが、カヴェルはそれを行っていないと批判する(ibid.:18[397頁])。つまり、(a) は単なる知的儀礼として一蹴できるが、(b) は、カヴェルの言葉を借りるならば「言語ゲームの外へ」(outside language-game) 出ることが不可能なことだと考えることであり、それに恐怖(panic)に近いものを感じるかもしれないとローティは述べる(ibid.:180[394頁])。

ここでローティが指摘する (b) の懐疑がもたらす「言語ゲームの外へ出ることができない」かもしれないという恐怖とは、まさしく、ブランダムが見出した自然主義と経験論との間にある緊張関係、そしてマクダウェルが問題にしている「不安」と考えてよいだろう。

しかし、ローティは、カヴェルが (a) でも (b) でもない、別の種類の懐疑を抱いており、その方がより根源的だという。ローティが指摘しているのは、次の箇所である²¹。

(c) 私が「全体としての世界の外部にいるものとして私たち自身を見ること」——私たちがいる対象たちのなかにまじってそこから別の対象たちを見るときのように、世界の中をのぞき込むこと——と呼んだ体験をまた別の仕方の特徴づけたものである。この体験が古典的認識論の（それどころか、道徳哲学の）基礎をなしていることが私には分かった。それは私にとって、世界を知らない無力さや世界に働きかけられない無力さの感覚として現れることがある。思うにそれはまた、存在の危うさと恣意性、ものごとがいまのようにあるという事実のまったくの偶然性という実存主義者の（あるいは、たとえばサンタヤーナ [Santayana] の）感覚の中でも働いている。(Cavell 1979:236、荒畑訳 444 頁)

21 このローティが参照しているカヴェルの文章は、荒畑靖宏による新訳から引いた。

ローティは、このカヴェルが提示している(c)の懐疑は、世界は、そもそも理解可能なものではない、つまり根拠を持たず、不合理なものではないか、言い換えるならば「サルトル的な偶然性の感覚」(Sartrean sense of contingency, Rorty 1982: 184 [401頁])とでも呼ぶべきサルトルの『嘔吐』に見られるような懐疑だと指摘する。

つまり、ローティの見立てによれば、カヴェルが「懐疑」を論じる際に、

- (a) 観念説がもたらす「懐疑」
- (b) カント的、ロマン主義的「懐疑」
- (c) サルトル的な実存的(?)な「懐疑」

の三つが混同されていることになる。

さらにローティが次のように述べるのは、本稿の考察が進む方向、すなわち、パースの宇宙論が懐疑論を斥けるために変遷していったと考えるにあたって示唆に富む。

(b)と(c)を結びつけること——すなわち、世界はある記述のもとでのみわれわれの手に入るという認識と、世界は自己記述(self-description)なしに存在する、すなわちそれはわれわれがいつか習得できるかもしれない、それ自身の言語などもたないという認識とをつなぐこと——はきわめてやさしい。意味は記述に相関しているが実在はそうではないのだから、世界の実在は「意味をなさない」ことになる。しかしわたしは(a)と(b)とをどうやってつないだらいいのかわからないと全く同様、(a)と(c)とをどうつなぐべきかわからないのである。したがって、わたしには(c)は(a)と(b)とを上手く結びつけるのには役立つとは思えない(Rorty 1982: 185 [403頁])。

なぜ、このローティの主張が、パースの宇宙論と懐疑論との関係を考える上で示唆的であるのか。それは、(ローティのカヴェル批判が直撃することになるが)パースは、(c)が(a)と(b)とを上手く結びつけるのに役立つと考えていた、正確に言うならば、(c)が提示するような「宇宙の無根拠さ」をめぐる懐疑が(a)と(b)の根底にあることを確信していたと思われるからである²²。

22 おそらくは、このようなパースの思考過程が、ローティのパースに対する非常に低い評価につな

事実、パースが實在論、彼の言葉を使えば「スコラ的實在論」へと舵を切る態度を鮮明にした「フレイザー版『バークリ著作集』への書評」(Fraser's The Works of George Berkeley, 1871. EP1:83-108.)においてパースが唯名論に抗い「實在論者」(realist)の立場を表明するとき、(a)と(b)を拒絶することが同時に表明されている。本来は一続きの文であるが、二つに分け、それぞれの箇所に(a)と(b)について付言して引用する。

實在論者は、経験においてわれわれの精神に直接現れるのとまったく同じ諸対象が、われわれの精神の外において、それらが経験されたように実際に現実存在していると理解する。すなわち、實在論者は直接知覚の教説(a doctrine of immediate perception)を支持するのである。[=(a)の觀念說的懷疑を否定し、トマス・リードの直接知覚説への支持を表明する。]
したがって、彼[=實在論者]は、精神の外にある現実存在(existence)と、精神の内にある存在を二つのまったく比例しえない様態(two wholly improportinable modes)にあるものとして切り離すことはしないのである。[=(b)を拒否し、カント的な路線を踏襲する。](EP1:91)

ローティがカヴェルを批判した(a)と(b)を同時に主張することが、なぜパースにとって可能であったのかというならば、この引用文の前において、カントが「コペルニクス的ステップ」(Copernican step)によって唯名論から實在論へ移行し、「實在的な対象(real object)を精神によって確定されたものとみなす」ことがカント哲学の本質であり、それを言い換えるならば、「實在を心的な活動にとっての不可知の原因(incognizable cause of mental action)としてではなく、その心的活動の通常の産物(normal product²³)とみなす」(ibid.)からである。

つまり、わたしたちの探究の出発点に實在を置くという觀念説の立場が懐疑論と不可知論の温床になるのであって、むしろ、探究の最終的な到達点として、すなわち(パース的に理解される)カントが考えるように思考によって最終的に構成されたものとして實在を考えるならば、(a)と(b)は同時に棄却されるとパー

がつていると考えられ、そのローティの評価にも一理あると論者は考える。

23 ここでは normal に「通常の」という日本語をあてたが、正確に言うならば、探究が順調に遂行され、もはや、懷疑の余地がなくなるまでに探究者の共同体における意見が一致しているという意味での normal であって、ブランダムなどの社会的な言語実践を重視する議論に引きつけるならば「規範的」(normative)という概念と結びつける理解も可能であろう。

スは考えるのである。

以上のような懐疑論をカント的な議論によって一蹴しようというパースの姿勢は、1877年に発表された「信念の確定」(The Fixation of Belief, EP1:109-123)までは維持されていると考えられる。というのも、そこでは、科学的な探究の方法が最も信頼が置けるものであって、「信念——現実との齟齬による信念の動揺による懐疑——科学的探究——信念の確定——その信念の現実との齟齬による動揺——……」という科学的探究のサイクルが提示され、経験的な齟齬に起因する十分な理由によって正当化されていない「懐疑」は真正な懐疑ではないとされるからである。

6. 「現実性」、そして「可能性」への新たな視点と宇宙論の展開

しかし、その「信念の確定」の直後、パースにとって最初にして最後のアカデミック・ポストであったジョンズ・ホプキンス大学での講師としてのキャリア(1879 – 1884年)の途上で、それまでのカント的な「思考によって確定されたものこそが実在である」という信念にゆらぎが生じる。そして、それこそがパースが宇宙論へと踏み出す契機となるのである。それはマクダウェルが近現代哲学にとって特徴的な不安と述べていた、「心が自分以外の実在に触れないままになるという脅威」にパースが気づかされた結果と考えられる。ここで、その経緯を素描したい。

本稿の前半部でも触れたが、パースの宇宙論は、彼の存在論での思考の深化に伴って変容していく。その最初の契機が、パースのジョンズ・ホプキンス大学時代の教え子からの感化であった。

宇宙論の最初の構想が示された「企図と偶然」(1884年)とほぼ同時期、ジョンズ・ホプキンス大学時代の教え子であったミッチェル(Oscar Howard Mitchell, 1851-1889²⁴)の示唆により、「指標詞」(indices)の重要性、すなわち現実の世界を指示する要素が命題の中に含まれなければ、それは有意味な命題とみなされないことに気づかされることになる。そのことが、パースの宇宙論の端緒を作ったと同時に、彼の記号論が始動する契機となったと考えられる。つまり、それはカヴァレル、ブランダム、マクダウェルが取り上げた懐疑論、不可知論が、パースが当初目論んでいたように容易に斥けられるものではなく、「世界とのつながり」

24 パースはミッチェルの才能を非常に高く評価していた(cf. EP1:227, EP2:537)。この若くして世を去った教え子がパースに与えた影響については Dipert (1994) を参照。

を保つことの困難を再認識させられたと考えられる。そのミッチェルを、指標詞を論理の代数学へ導入してくれた最大の功績者として名前を引きながら、パースは次のように述べる。

現実的な世界 ([t]he actual world) は、いかなる記述によっても想像の世界 (a world of imagination) から区別されることはありえない。したがって、代名詞 (pronouns) と指標詞は、主題が複雑になればなるほど、その必要性もさらに増大するのである²⁵。(EP1:227, On the algebra of Logic, 1885.)

そして、1890 年頃、「現実性」への視点はさらに深化され、ドゥンス・スコトゥスの「このもの性」(haecceitas) を受け容れることで、第二性 (secondness)、すなわち現実性や事実性の実在を認める存在論をパースは確立する。これが、1891 年から 1893 年にかけて『モニスト』誌上で展開される「形而上学シリーズ」の原動力となっていると考えられる。

さらに 1897 年頃、シュレーダーの書評、そしてジェイムズへの手紙の中で、「可能性」についてのこれまでの見方、つまり、情報の欠如としての可能性という考え方をあらため、それも実在として認めることになる。これによって実在的可能性 (real possibilities) の存在を支持するパースの「スコラの存在論」(Scholastic Realism) が完成するわけだが、これを受けて展開されるのが、パースの宇宙論の完成形態といってよい「推論と事物の論理」(RLT) という連続講義である。

このように、存在論、認識論、論理学におけるパースの覚醒が、その直後に、彼の宇宙論の展開と方向転換を触発していることが明らかである。ショートを典型とする、パースの宇宙論に否定的な見解を持つ、もしくは、そのような宇宙論そのものを無視する研究者たちは、パースの宇宙論が歩んできた過程を無視し、その結果のみで是非を判断している点に問題があるのではないか。そこで、そのパースの宇宙論の生成史を整理するならば、以下のようになる。

25 ここにラッセルの「確定記述＝固有名詞」説を批判したクリプキを連想することは容易かもしれない。実際、パースは、クリプキが論じる可能世界意味論と同様の議論を、宇宙論の中で展開している (RLT)。

- (1) 1883 - 4年頃の「指標詞」（実在との現実的なつながり）の重要性への認識
→「企図と偶然」（1884年）におけるパース宇宙論の原型の提示
- (2) 1890年頃の「現実性」（このものの性）の実在を認める存在論の確立
→『モニスト』誌の「形而上学シリーズ」（1891 - 1893年）
- (3) 1897年頃の「可能性」の実在を認める存在論の確立＝スコラ的実在論の完成
→ケンブリッジでの連続講義「推論と事物の理論」（1898年）

このように整理すると、パースの初期のデカルト主義批判(1868 - 1878)は、ローティの言う(a)の観念説に由来する懐疑論を対象としており、カント的な対応で克服可能な(b)の懐疑論と共に否定されることになる。

しかし、パースが考察を進めて行くにつれ、デカルトの普遍的な懐疑が、安易なプラグマティストが「懐疑にも十分な理由がなければならない」と一蹴できるような代物ではないこと、すなわち、後世のカヴェル、ブランダム、マクダウェルが取り上げる「心と世界との関係についての不安」が当初のパースの予想を超えて深刻な問題であることが明らかとなり、それが上の整理であげた(1)と(2)の宇宙論の構想へとパースを促したと考えてよいだろう²⁶。

さらに懐疑論・不可知論を完全に払拭する、すなわちカヴェルがもっとも警戒した(c)「サルトル的な偶然性の感覚に基づいた実存的な懐疑論」を克服するためには、ブランダムが言う、宇宙の始原から現在の世界、そして未来に至るまでの「大きな連なりに含まれるすべての構成員をまとめあげる」宇宙論が要請され、それが上述の整理の(3)へとパースを駆動したのではないだろうか²⁷。

26 レイノルズも、宇宙論の根底にある、世界を知りたいという願望は、より深層にある「わたし自身を宇宙の中で居心地良くしたい」(make ourselves feel "at home in the universe")願望ではないかと述べる(Reynolds 2002:177-8)。

27 言わずもがなのことではあるが、パースとカヴェルは同種の懐疑論を共有しつつも、そこで袂を分かť。すなわち、19世紀人のパースは(c)の懐疑論を放逐するために宇宙論という全体性へと向かうわけだが、20世紀人のカヴェルは当然のことながら、全体性への志向を厳しく戒める方向へ舵を切る。さらに付言すれば、ここでジェイムズに触れる余裕はないが、ジェイムズにとっては(c)の懐疑論こそが初めから敵の本丸であったと考えてよい。それは、彼の青年期の精神的な問題に起因することでもあるが、ジェイムズがパースのプラグマティズムに強くひかれたのは、懐疑論に陥ることなく、世界の現実性を強く捉えようとしたからである。(その点が、ジェイムズが現実の問題に拘泥しすぎているとしてパースから批判されるのが皮肉ではある

このようにパースの懐疑論・不可知論への警戒心とその本質への理解が深まれば深まるほど、彼の宇宙論も深化し、その内実を複雑に変容させていくことになる。しかし、ブランダムが一定の評価を与えるように、パースのプラグマティズムが捉えたような、19世紀の進化論と統計学に裏付けされた、新しい「自然」概念と、人間の思考が習慣形成のプロセスとして捉えられるという「同型性」のみをもって、カヴェル、ブランダム、マクダウェル、そしてローティが控えめながらも提起していたような「不安」「懐疑」が解消されるわけではもちろんない。

その同型性が単なる表面的な類似性に留まるわけではなく、「習慣獲得の傾向」が宇宙全体に遍く行き渡っているという本質的な同質性が明らかにされてこそ、真の意味で「大きな連なりに含まれるすべての構成員をまとめあげる」宇宙論が成立し、それらの不安や懐疑が解消されるとパースは考えていたのではないか。それが「習慣」を基軸に置いた、すなわち記号の最終的な解釈項は習慣であると主張する記号論による自然と（人間的）思考の本質的な同質性の主張であり、その記号論を軸としたパースの学問体系の構想であろう。そのパースの試みは、哲学、そして人文学が宇宙について語ることが可能なのか、そして、かりにそれが可能だとしてもそれにどのような意義があるのかという問いに、「パースの宇宙論」という局所的な主題とは離れて答えるものになるであろう。その問いについての考察は他日を期したい。

参考文献

- Peirce, Ch. S. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols.1-6 (1931-1936), Eds. Ch. Hartshorne and P. Weiss. Volumes 7 and 8 (1958) Ed. A. Burks, eds. Cambridge, MA; Belknap Press of Harvard University Press. (ここからの引用は慣例に従い、CP.1.23.のように、前の数字で巻、後ろの数字でパラグラフ番号を表記した。)
- Peirce, Ch. S. (1992) *The Essential Peirce: selected philosophical writings*. Volume 1(1867-1893), Eds. Nathan Houser and Christian Kloesel, Bloomington: Indiana University Press.
- Peirce, Ch. S. (1998) *The Essential Peirce: selected philosophical writings*. Volume 2(1893-1913), Eds. The Peirce Edition Project, Bloomington: Indiana University Press.

が。) そのことは、ホワイトヘッドが座右の銘にし、彼の著作の中に度々現れる、ジェイムズが弟のヘンリーに当てた手紙の中の「原理に還元しがたい頑固な事実ひるむことなく耐えねばならない」という言葉に表れている。ジェイムズにとって、事実を原理に還元して理解したいという合理的な願望が強くある一方で、事実が原理に還元された途端に、思考が世界から遊離し、あてもない形而上学的悪夢に悩まされるという青年期の彼を苦しめた苦境に陥ることになるのである。ジェイムズの哲学と彼の青年期の苦悩、そしてそれを脱するにあたってルノーヴィエ(Charles Renouvier, 1815-1903) から受けた影響については Meyers (1986: 特に 45.f) を参照。

- Peirce, Ch. S (1992 [1898]). *Reasoning and the Logic of Things*. Ed. Kenneth Ketner. Cambridge (MA): Harvard University Press.
- Anderson, Douglas R. (1995). *Strands of System: the Philosophy of Charles S. Peirce*. West Lafayette: Purdue University.
- Brandom, Robert B. (2011). *Perspectives on Pragmatism: Classical, Recent, and Contemporary*. Cambridge (MA): Harvard University Press. (ブランダム『プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか』上・下巻、加藤隆文他訳、勁草書房、2020年。)
- Cavell, Stanley. (1979). *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy*. Cambridge (MA): Clarendon Press, Oxford, Oxford University Press. (スタンリー・カヴェル『理性の呼び声 ウィトゲンシュタイン、懐疑論、道徳、悲劇』荒畑靖宏訳、講談社、2024年)
- Dipert, Randall R. (1994). The Life and Logical Contributions of O. H. Mitchell, Peirce's Gifted Student, *Transactions of the Charles S. Peirce Society* Vol. 30, No. 3 (Summer, 1994), pp. 515-542.
- Esposito, Joseph. (1980). *Evolutionary Metaphysics: The Development of Peirce's Theory of Categories*. Athens: Ohio University Press.
- Forster, Paul. (2011). *Peirce and the Threat of Nominalism*. New York: Cambridge University Press.
- Gallie, W. B. (1952). *Peirce and Pragmatism*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Goudge, Thomas A. (1950). *The Thought of C. S. Peirce*. Toronto: University of Toronto Press.
- Hacking, Ian. (1990). *The Taming of Chance*, Cambridge University Press. (イアン・ハッキング[1999年]『偶然を飼いならすー統計学と第二次科学革命ー』石原英樹、重田園江訳、木鐸社。)
- Hausman, Carl. R. (1993) *Charles S. Peirce's Evolutionary Philosophy*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hookway, Christopher. (1985). *Peirce*. London: Routledge.
- Hookway, Christopher. (2000). *Truth, Rationality, and Pragmatism: Themes from Peirce*. Oxford: Oxford University Press.
- Lane, Robert. (2018). *Peirce on Realism and Idealism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McDowell, John Henry. (1996). *Mind and World: With a New Introduction*. Cambridge (MA): Harvard University Press. (ジョン・マクダウェル『心と世界』神崎繁、河田健太郎、荒畑靖宏、村井忠康訳、勁草書房、2012年)
- Meyers, Gerald E (1986). *William James: His Life and Thought*. New Haven and London: Yale University Press.
- Misak, Cheryl J. ([1991]2004). *Truth and the End of Inquiry. A Peircean Account of Truth*. (expanded paperback edition [2004]). Oxford: Oxford University Press.

- Misak, Cheryl J. (2000). *Truth, Politics, Morality*. New York, Routledge. (シェリル・ミサック [2023]『真理・政治・道徳』加藤隆文、嘉目道人、谷川嘉治訳、名古屋大学出版局。)
- Murphey, Murray. (1961). *The Development of Peirce's Philosophy*. Cambridge (MA): Harvard University Press.
- Parker, Kelly. (1998). *The Continuity of Peirce's Thought*. Nashville, TN: Vanderbilt University Press.
- Prigogine, Ilya. and Stengers, Isabelle. (1984). *Order out of Chaos: Man's New Dialogue with Nature*, New York, Bantam Books. (イリヤ・プリゴジン、イザベル・スタンジェール [1987]『渾沌からの秩序』伏見康次・伏見譲・松枝秀明訳、みすず書房)
- Reynolds, Andrew. (2002). *Peirce's Scientific Metaphysics: The Philosophy of Chance, Law and Evolution*. Nashville: Vanderbilt University Press.
- Rorty, Richard. (1982). *Consequences of Pragmatism*. Brighton, Sussex, UK, Harvester Press. (リチャード・ローティ『哲学の脱構築 プラグマティズムの帰結』室井尚、吉岡洋、加藤哲広、浜日出夫、疋茂訳、御茶の水書房、1985年〔新装版1994年〕)
- Short, Thomas. L. (2010). 'Did Peirce have a cosmology?' *Transactions of the Charles S. Peirce Society*.46(4), p.521-543.
- Short, Thomas. L. (2022). *Charles Peirce and Modern Science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomason, Amie L. (2017) "What Can We do. When We Do Metaphysics?", in Giuseppina D'Oro & Soren Overgaard eds, *Cambridge Companion to Philosophical Methodology*, Cambridge University Press. (エイミー・L・トマソン [2020]「わたしたちが形而上学を行うとき、私たちは何を行うことができるのか?」松井隆明訳、『現代思想』、青土社。)
- Turley, Peter. T. (1977). *Peirce's Cosmology*. New York: Philosophical Library.
- Whitehead, Alfred North. (1929[1978]). *Process and Reality* [corrected edition. Eds. David Ray Griffin and Donald w. Sherburne.] New York: Free Press.
- 伊藤邦武 (2006)『パースの宇宙論』、岩波書店。
- 朱喜哲 (2024)『人類の会話のための哲学 ローティと21世紀のプラグマティズム』、よはく舎。